

Ⅲ 路地園芸トライアルのまとめ

1 トライアルの従前従後

1) 基本的な修景の方向について

第2回ワークショップ終了後、ワークショップにおいてで体験を踏まえて、実践トライアルにおいてどのような修景を行うか、講師、事務局、十條あすみの会主要メンバー及び公社スタッフで協議した。

修景の方向性としては、以下のことがあげられた。

景観上好ましくないものを園芸によって修景する

Jコーポブロック塀、井戸周辺

アイストップとなる部分を修景する

井戸周辺、H邸前

景観を整理する

井戸周辺、H邸前

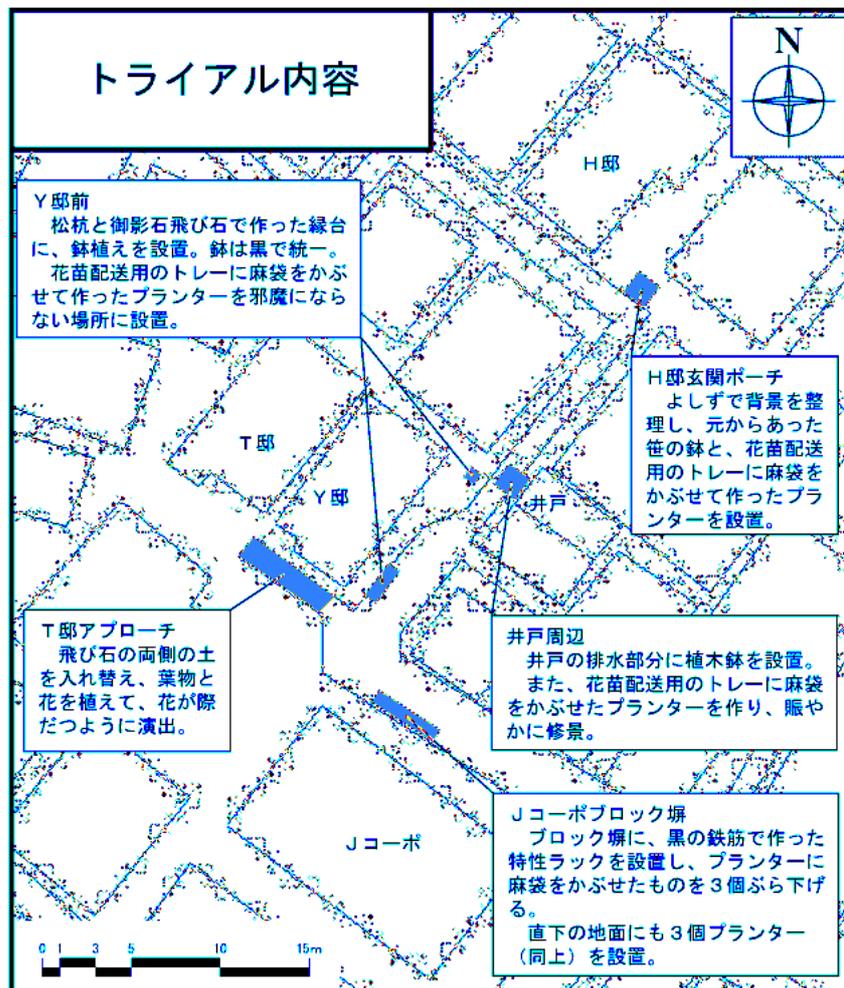
今の景観を活かす・レベルアップする

Y邸前・T邸アプローチ



参加者

- 上十条一丁目西町会 : 沖田会長
- 十條あすみの会 : 佐久間、高尾
- グリーンダイナミクス : 賀来、片山
- 公社 : 富永
- 事務局・都市計画同人 : 木村、海老原（敬称略・順不同）



2) 従前従後

Jコーポブロック塀

現況

Jコーポブロック塀は、ブロック塀の修景を目標としたが、下記のような問題点が考えられた。

塀につり下げの方法は地震などに際して塀が倒壊するのではないか。

アパートの引越やその他工事車両等、車両がブロック塀の途中まで侵入してくる。

ブロック塀の路地の奥側に、電柱が立っていることと、塀の裏側に物置があり、塀に何らかのものを取り付けの場合、若干入口側に寄せなくてはならない。

修景の方向

ブロック塀に特注ラックを設置し、プランターや鉢を置く。

塀につり下げのラックを町内の鉄工所に依頼し、特注で作る。ラックに、プランターをぶら下げるハンガーをかけ、そこにプランターを設置する。

ラックは転倒しないように、電柱の幅と同じ長さで足を出し、塀によりかける。

プランターは白色ではないもの、できればテラコッタ製のものが良いが、重量と価格の面から白色のものにコーヒーマグの麻袋を巻き付ける。

プランターは、3台ぶら下げ、地面にも3台置く。

修景の実践

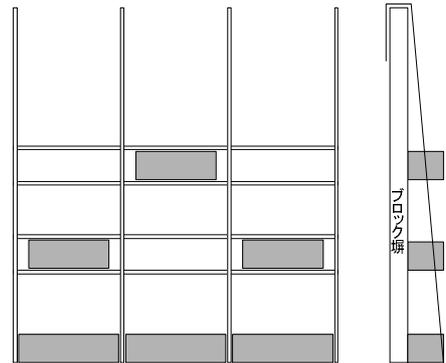
特注ラックは鉄筋で作成し、足を出すものではなく、地中に埋めて安定性を高めた。

プランターは白色(北区十条まちづくり担当課提供)のものに、コーヒー豆専門店より無償提供を受けた麻袋で装飾した。麻袋は端部を花の形に折っている。

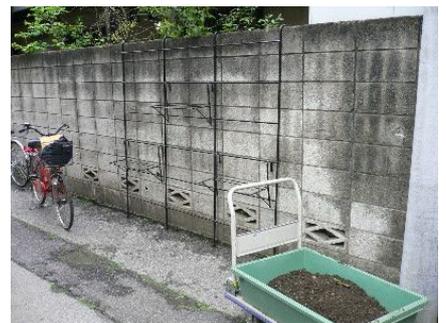
ラックの黒とプランターの麻袋が目立たないため、葉の緑と花の色を引き立てている。



ブロック塀従前



ラックのイメージ図



鉄筋で作ったラックを設置



プランターに麻袋を巻く



ラックにプランターを設置



T邸アプローチ

現況

幅員 0.8mほどの玄関アプローチに敷石が並べてあり、その敷石の両側に桜草などが植えてあり、現況においても美しいアプローチとなっている。

しかし、土がやせていることに加え、その下部は石炭ガラとなっていることから、その改善が求められる。

修景の方向

土を 10 cm程度入れ替えて、土壌改良する。

葉ものと花ものを組み合わせて、より豊かなアプローチとする。

修景の実践

土を 10 cm程度除去し、新たに培養土が6、完熟腐葉土が3、完熟牛糞堆肥が1で混ぜた土を入れる。(他の鉢やプランターも同じ)

タイム等の地被植物を植え、葉物を加えることにより、豊かさを演出できたとともに、葉の緑が花の色を引き立てている。



従前



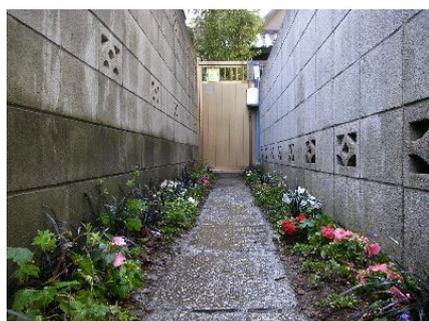
土を入れ替え



植物を仮置き



一斉に花植え



完成



Y邸前

現況

大理石様のブロック2段積みの上に黒いフェンスが設置されており、シックな雰囲気を形成している。2項道路は後退済み。すっきりしているがうるおいがない。

修景の方向

T邸と井戸をつなぐポイントをつくる

2段積みブロック部分に収まるように、門扉を挟んで2箇所低い縁台を置いて、その上に鉢を並べ、フェンスの冷たい表情を緩和する。

縁台はフェンスに併せて黒とし、足は石などを使って大理石様のブロックに併せる。

鉢(陶器、磁器、素焼き等)に花を植える。鉢カバーをつくる。鉢は統一する。

修景の実践

路地の奥側の縁台は、居住者が自転車等を置くことがあり取りやめ、足の石は2段重ねとし、縁台の板は1枚は背板として活用した。

縁台の板は焼き杉杭の先端をカットして4本を束ねたもの。カットした先端部分は、焼いて色調を整えた。足の石は庭の飛び石用の丸井大理石を用いた。

鉢は色を黒で統一したが、大きさは植える花に併せて統一はあえて避けた。一部、輸送時に欠けた鉢があったが、垂れ下がる葉ものを植えて活用した。

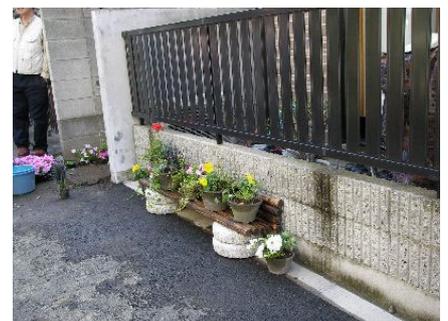
奥側の縁台が設置できなかったが、一番奥に花輸送用のトレーに麻袋を巻き付けたプランターを作成し、置いた。



従前



縁台を2台設置したところ



実際の設置状況、縁台の板1枚は背板に、足は2段に



麻袋で自家製プランターを作成、左上にある黒いトレーが原型

自家製プランターに花を植え付ける



実際の設置状況、最奥部に自家製プランターを設置

井戸周り

現況

通行人の視線を集めるポイントである。視察時点からはかなり整理され花も咲いているが、まだ、空の鉢や園芸の道具が置かれていて煩雑なイメージ。

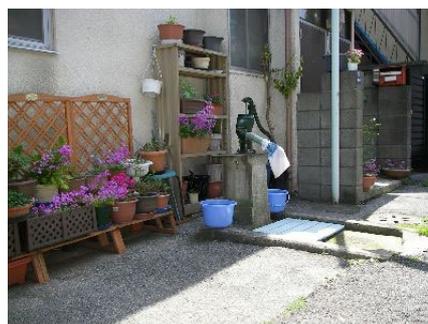
修景の方向

井戸の横にポイントになるよう大きめの鉢を配置。
建物の棚に園芸を楽しんでいる感じを小物で表現。

修景の実践

井戸の脇に大きめの鉢(ナスタチウム)を置くとともに、苗の入っていたトレーで作ったプランターも配置。(その後地元住民により一部鉢を入れ替え)

建物の棚については、プライベートな部分なので今回は手を加えない。(今後の展開に期待)



従前



従後

ワークショップ終了後
現在



H邸前

現況

路地の突き当たりであり、アイストップとなる重要な位置を占めているが、色々な植物や生活用品が置かれ若干乱雑な景観となっている。

修景の方向

すだれなどでプライベートな部分と緑をみせる部分を隔てる。

現在、葉物だけであるが色のある植物を配置する

修景の実践

よしずを立ててプライベートの部分を隠す。

よしずの手前に緑の笹(既存)と、色が際立つ花もの(新規)を置いた。



従前



従後

2 路地園芸トライアルのまとめ

今回のトライアルを終えて、以下のような成果と課題を得た。

1) 成果

まちづくりに関心の少ない住民のまちづくり活動への参加の契機

一般的にまちづくりに関心を持っている住民は少ない。今回、園芸を切り口として、まちづくり活動や日常的な町会活動に参加する機会が少ない住民が、まちづくり活動のフィールドに参加する契機を提供できたと考える。

異分野交流

前項に関連しているが、まちづくりと異分野の専門家とのタイアップによるまちづくり活動へのアプローチ方法を提供できたと考える。

身近な修景方策のプレゼンテーション

今回のトライアルは、大きな予算をかけずに実施しているとともに、身近な材料を活用して修景を行っている。参加した住民からも、こんなにきれいになるとは思わなかったという感想が聞かれるとともに、取りかかる人からきれいになったねと声をかけられるそうである。

まちの視点からの園芸

園芸を個人の楽しみとして行っている住民は多い。しかし、今回まちからの視点に立って園芸を行った。その結果、通りかかった住民からきれいだと評価されたと、参加した住民から謝辞をいただいた。

園芸に関する技術・知識の普及

路地園芸探検の結果からも園芸を行っている住民は非常に多いが、これらの住民は独学で行っている場合が多いと考えられる。今回のワークショップで、土の配合や太陽光の当て方、植え方など様々な園芸に関する講義あるいは質疑応答が行われた。園芸に関する技術や知識に対して、住民にニーズがあることが確認されたとともに、今回のワークショップで参加者に対して技術や知識の向上が図られたと考える。

園芸のネットワークの形成の土壌づくり

路地園芸探検により、同じ町内会での様な園芸がされているかが、一部ではあるが参加者に認識された。町会では、町内の路地園芸マップの作成を模索するに至っている。こういった取り組みを機会に、住民相互の園芸に関するネットワークの形成が期待できる。

2) 残された課題

2 項道路及び道路占有

今回の路地園芸トライアルは、2 項道路の問題や道路占有の問題を棚上げして行った。実際に路地園芸を実践した路地も 2 項道路であり、Y 邸前は 2 項道路後退した部分に縁台を設置している。今回の配慮点としては、道路上に設置するものは、簡単に移動可能なものとして行った。

日常の園芸活動への対応

今回の花の種類を選定は専門家にゆだねた。このため、一般的に知られていない種類や、似通った名前の花など、参加者もわからなくなっているものも多い。このため、通りかかった住民に説明が難しかったり、参加者の日常のメンテナンスなどにおいて難しい部分がある。もう少し、身近な花などで行ったほうが、解りやすかった部分もある。

四季の都市景観の演出

今回使用した花の種類は、植え替えなどの手間の少ない秋頃まで咲く花となっている。これに加えて、四季の花のアレンジや展示位置のローテーションなどを提示できると、四季折々に多彩な表情を見せる都市景観の演出を提示できたと思う。

3 終わりに

まちづくりの分野と園芸の分野の専門家とのコラボレーションによる、まちづくりへのアプローチを試行した。従来、まちづくりという場に参加しない住民の参加が見られたことから、一定の成果があったと考える。今回は、従来からまちづくりに理解のある上十条一丁目西町会で行ったが、まちづくりの土壤がない地域においての地元に入っていく一つの切り口を提示できたと考える。

ワークショップの実施においては、地元の十条一丁目西町会及び十條あすみの会の皆さんの積極的な参加がなくては実現しなかった。地元の皆さんのご協力とご理解に深く感謝します。

また、株式会社グリーンダイナミクスの賀来宏和代表取締役及び片山陽介氏には、大変忙しい時期に講師をお引き受けいただくだけでなく、様々なノウハウの提供とともに、土づくりなどに一緒に参加していただき、大変感謝しています。

最後になったが、今回のトライアルを実施する上で、活動費を助成していただいた(財)都市化研究公室に感謝するとともに、北区環境課には当初予定より多くの花苗などを供給していただき感謝します。

